

徳川家康

13

泰平胎動の巻
江戸・大坂の巻

徳川家康

山岡荘

徳川家康

泰平胎動の巻 ・ 江戸・大坂の巻



山岡莊八 講談社



徳川家康 第十三卷 泰平胎動の

巻 江戸・大坂の巻 昭和三十九

年六月二十日第一刷発行 著者

山岡莊八 発行者 野間省一 印

刷所 凸版印刷株式会社 製本所

和田製本株式会社 発行所 株式

会社講談社 東京都文京区音羽町

三ノ一九 振替 東京三九三〇電

話 東京(九四二)一一一一(大代表)

©山岡莊八 一九六四

定価 六百二十円

徳川家康

13

泰平胎動の巻
江戸・大坂の巻

目次

泰平胎動の巻

背骨作り

七

桜の乱行

三二

江戸の抱負

四七

於大の生涯

六五

出ずる日落つる日

八六

人質草

一〇四

桐の片桐

一二六

婚礼の夢

一四五

秀頼の城

一六一

江戸開府

一七九

百花萌ゆ

二〇一

春色秋色

二二三

静かな暴風

二三七

江戸・大坂の巻

朝の葵

二六一

若い桐

二八三

器量と器量

三〇一

花と悪夢

三一六

世界の風

三三三

身勝手世勝手

三五四

付 録 (参考地図及び諸家系譜)

装幀 稲垣行一郎
挿画 木下二介
箱裂地 麻地草花人家文様茶屋染
提供 山口勉
表紙金版 徳川家康直筆署名

徳川家康

13

江戸・大坂の巻
泰平胎動の巻

泰平胎動の巻

背骨作り

一

家康の許へは、依然として、井伊直政、本多忠勝、榊原康政、大久保忠隣（たなちか）、徳永寿昌の五人の他に、秀忠のもとから本多正信がしげしげと出入りしていた。

前記の六人が家康の創業の際の閣僚であり助手であり、技師でもあった。むろん設計者は家康自身で、彼等の表面の仕事は論功行賞の調査という名目であった。

その調査にもとづいての人物配置。それが待望の泰平の世を築き得るや否やの鍵になる。

その閣僚の中でも、最も家康の心事をよく察して、家康を扶たすけ得るのは本多正信であった。

今試みに彼等自身の新しい封禄を記してみると、それが、いかに外様大名と大きな開きを示しているかがよくわかる。

本多佐渡守正信	二万二千石（上州八幡）
徳永式部法印寿昌	六万七白石（濃州高須）
大久保相模守忠隣	四万石（相州小田原）
榊原式部太夫康政	十万石（上州館林）
本多中務少輔忠勝	十二万石（勢州桑名）
井伊兵部少輔直政	十八万石（江州佐和山）

前田利長の百十九万五千石は別としても、遠州掛川の山内一豊までが二十万石以上に加増されて土佐の太守になっているのだから、いかに譜代の人々に薄かったかがよくわかる。

それで誰も不平を洩らすものはなかった。つねに家康を動かし得る本多正信など、二万二千石でも多いと辞退を申出たほどだった。

したがって井伊直政にせよ、本多忠勝にせよ、わが身の手柄と引きくらべて、充分に外様大名を説得出来たのだと

いってよい。

とにかく慶長五年中に、あらかた配置変えは通告し終つて、残るのは上杉家のある奥羽の一部と、九州の島津家だけになっていた。

その双方とも、むろん家康の胸中ではすでに成案があるのに違いない。

「——これで目安はついた」

そう洩らすと、家康は、すぐさま藤原惺窩せいこを呼んで漢書十七史を講じさせて、熱心にこれにきき入っていた。

時代をつくる者は「力の配置——」だけで決して息抜きすべきものではない。そのことを太閤の生涯が、身をもつて示して呉れているからだった。

きびしい乱世を生き残つた戦国の人々には、ともすれば武力で事を決そうとする、乱暴きわまる習性の残っているのは否むべくもなかった。

その残された習性を何に依つて払拭するか？

わずらわしい法度はつどや法律の類では、押えきれないことも又身をもつて知っている。したがって、ここでは武士も町人も百姓もみなひとしく仰いで誤りない学問の普及を考えなければならぬ。そのために自身で、改めて和学も漢学も仏教も神道も、無心に習つてみようと考えている。

そんな時にお龜かめの方が七番目の男の子を産んだのだ。

家康はそれを幸先よしと受取つて、直ちに学問の次になすべき仕事にも手をつけた。富国の策である。富がなければ、泰平は保ち得ない。それは学問と並行して武力とともに三本鼎立さんぽんていりつすべき大事な時代の脚であつた。

その大事を助ける、ふしぎな人物を、大久保忠隣が家康の前に連れて現われたのは、七男に五郎太丸と命名して、西の丸でお七夜の心祝いをしている時であつた……

二

五郎太丸と幼名をつけられた嬰兒えいじがどんな成人の仕方をするか？

この城のあるじの秀頼にとって、秀忠は舅しゅうとになると決まつていった。そうなると、年齢の近い六男の辰千代（忠輝）や、この七男の五郎太丸が、秀頼とともに次代を大きく背負う時があるかも知れない。

（果してそれまで、自分はこの世に生き残り得るや否や……）

信長が、この世を去つたのは四十九歳。

それから十年以上も生き残つて、五十九歳で嬰兒の父になつたのだ。家康の感慨は無量であつた。

若し彼が秀吉と同じ齡しか恵まれていなかったとすれば、五郎太丸は数え年の四歳で父を失うことになる……

そう思つて来ると、家康自身、笑つてよいのか泣いてよいのかわからぬ感情に、もう一つ切ない想い出までが加わった。

家康が父を失つたのは数え年八つの三月だったが、それより以前、生誕一年半でもう一応彼は母を運命の手に奪われてしまつていたのだ。

ところがその母は後再び彼の手に戻された。そして現に、この大坂城の西の丸へやつて来ている。

家康が西の丸で、近親者たちを招いて能狂言を催す氣になつたのは、五郎太丸の出生を祝う氣持と、その老母伝通院を慰めようとする二つの意味からであつた。

正直のところ舞台の正面に坐つていても家康は殆んど能も狂言も見えていなかった。

(人生とはおかしなものよ……)

むろん嬰兒はまだ産屋^{うぶや}であつたが、老母伝通院がとろりとして舞台に見入っている姿は、ただそれだけで胸がいっぱいになつて来た。

その演能のあとであつた。

家康が居間に引きあげて来ると、そこへ大久保忠隣が、「ただいまの舞台の、大小^{おわい}前で小鼓^{こづ}をつとめました者にござりまする」

三十あまりの、きりりとした顔だちの男を伴つてやつて

来たのだ。

家康はその男にかくべつ見覚えはなかつた。が、ここで紹介されると、もう忘れることのない美男に見えた。

(どこか信長に似ているようだ……)

信長に似ている男が、舞台で小鼓を打っているというのがおかしく、

「そう申せば、小鼓の音は冴えていたのう」

たぶん忠隣は、褒美をやらせるために連れて来たのだらうと思ひ、家康はバツを合せた。

「名は何と申すの」

「はい、十兵衛長安^{ながやす}と申しまする」

と、忠隣は答えた。

「なに十兵衛……すると、それは、日向守光秀が名だ」

家康は改めてその男を見直した。

顔が信長に似ていて、名前が光秀と同じだというのが、ふつと笑いを誘つたのだが、笑ひの方はすぐに押えた。

「して姓は？」

「姓は、武田信玄公に禁じられて、いまだに無いままの由にござりまする」

「なに、信玄に姓を禁じられたと……」

「はい。それについて挿話がござりまする」

忠隣はどうやら褒美だけが目的で連れて来たのではなさ

そうであつた。家康は又改めてその男を見直した。

三

顔のしまりにも、眉の間にも才気があふれている。いや、その眼の光りも尋常ではなかった。

何かやろうと思ひ立つたら、信長のように執念深く、はげしくやり遂げようとする人物に違ひない。それでいて人を喰つた好色さも、あらわに鼻梁から唇辺のあたりへ匂っている。

「妙な者を伴つて参つたの。いったいどうして信玄に姓を禁じられたのじゃ」

男は神妙に忠隣のうしろへ坐つて、すべては忠隣に任せきつていゝという感じであつた。

「はい。子供のおりからお傍へ仕えて居りましたが、少々才気がありすぎまして、差出口が多すぎた由にござりまする」

「ほう、信玄公に差出口をしてのけたか」

「それも小鼓を金山まで持ち出しまして、その音で地下の黄金の埋蔵量をうかなりましたそうで、信玄公は殊のほか迷信をきらいましたものと見え、それでこの手猿樂めが！

と叱りつけ、幸若の名乗りを禁じられた由にござりまする」

「ふーん。幸若十兵衛が、手猿樂の十兵衛に落されたと申すか」

家康はこんどは思わず破顔一笑していった。才氣走つた若者が出しやばり過ぎて叱られているさまが、眼に見えるような気がしたのだ。

「十兵衛、そうであつたな」

大久保忠隣も笑いながら、はじめてその男に声をかけた。

「おたずねの通りにござりまする」

その男は、家康の方は見ず、きちんと忠隣を間において作法どおりに答えていった。

家康は笑いながら、

「直答を許す。手猿樂というは、あまり名譽の名ではあるまい十兵衛」

「はい。この田舎役者め……というほどの意味かと存じまする」

「それで、そなたは、信玄公が亡くなられてもずっと手猿樂で通して来たのか」

「はい。たしかに役者と致しましてはその辺のもの……お目が高かったと存じましたれば」

「それにしても年齢が合わぬ。信玄公がお亡くなりなされたおり、そちは何歳であつたぞ」

「十三歳でござりました」

「なに十三……すると本年幾つに相成るのじゃ」

「はい。本年四十歳に相成りまする」

「そうか。なるほどそうなる筈じゃ。するとその方、二十七年間も手猿樂で押し通したか」

「はい」

「若いのに」

「は……？ 何と仰せられましたので」

「若いと申したのだ。わしは三十そこそこかと思うたぞ」

「心身を勞さずに生きて参ったせいで、お差し^{はず}ゅうござりまする」

「忠隣」と、家康は忠隣に向き直って、

「この者に、手猿樂以外、何の一芸があるというのじゃ」

もう忠隣が、何のためにこの十兵衛という男を連れて来たかは家康によくわかつていた。

忠隣は急に真顔になって家康に一礼した。

「実は、この者が、信玄公に差出口を致しましたとおり、地下に埋藏されてある黄金の氣をトウに、ふしぎな才能がござりまする。言わば生れながらの山師ではあるまいかと存じまするが」

「山師か」

と、家康はがっかりしたように言つて本多正信をかえりみた。

四

家康のかたわらで、本多正信もつねに人物試問の眼は光らしている習慣だった。が、彼は家康が眼を向けると、さつさと視線をそらしていった。

(ものにはなりますまい……)

と、いう合図ではなくて、もっと試問をしてみねば、わかる筈はないという合図らしく見えた。

そこで家康はまた手猿樂の十兵衛に向き直った。

「そちは、この家康に仕官したいと思うのか」

こんどはいきなりずばりと問いかけた。

「はい。大久保相模守さまが、若し上様のお眼がねに叶^かうたら、大久保の御姓を名乗らせて遣わそうとおっしゃりまする。それゆえ相模守さまを通じて、わが身に持てるもののすべてをご奉公に賭けてみたいと夢見るように相成りました」

「やっぱ山師でかう」

「山師……と一口に仰せられますが、山師は地形を眺め山相を分析し、これを切りひらかねば目的を達し得ませぬ。したがって算盤に通じ、土木に通じ、開墾、植林、道路、橋梁の打通など、これから泰平の御代が参りますると、無うては叶わぬ一芸かと心得まする」

家康はニヤニヤと笑い出した。

この広告で信玄を怒らせたのだろうと思うと、自然に頬がゆるんで来る。

「すると舞台では手猿樂じゃが、泰平の御代に算盤を持たせると達人になると申すのか」

「達人……は恐れ入りました。そのようなものではござりませぬが、第一にご奉公出来ると存じまするのは、江戸と京、大坂の間の道普請にござります。いまだ人心は泰平になれませぬゆえ、時折り無法な考えを起す者が出て参らぬとは保証致しかねます。その折りに、先ず道路の整備が出来ませぬでは、第一に用兵の折りの不便、第二には物資の陸上輸送が叶いませぬ。又第三には……」

「もうよい」

家康は笑ってさえぎった。

「道の話はもうよい。して、黄金はどこで掘るのじゃ」

「それも道路の整備が先でござりますが、それがしが最初に手をつけてみたいと存じますのは、佐渡と石見の金銀山。はい、甲州は少し山が老いてござります。それに、この近くの多田銀山は豊家で管掌してござりますれば、江戸に近い伊豆の金山、又奥州の南部あたりにも有望な山気が感得致しますゆえ、これ等をお開きあって富国の道を講じなさるが大切な国策かと存じまする」

はじめは神妙そのものだったこの男は、いったん口を開くと、ふしぎな雄弁家に一変した。必ずしも家康の好みに叶う人物の型ではなかったが、どこかに、相手の胸へ喰い入るような迫力は持っている。

「私が申し上ぐるのは、通貨を明国みんこくあたりから輸入致して居るようでは、日本国の発展はないということとござります。万民の所用ぐらいは立派な通貨を鑄造致して通用させる。そうなりますと、戦のほかに、生計の道を発見致し、上は大名衆から下は杣夫きまや漁夫に至るまで、それぞれ富の開発にかかります。私の働いてみたいのは、そうした新しい泰平日本へのご奉公にござりまする」

家康は、もう一度本多正信の方をそうっと見やった。

五

正信もびっくりしたように眼をみはって十兵衛長安を見やっていた。そして、チラリと視線の合った家康に、
(これはただ者ではない……)

二人だけに通ずる瞬きで応じていった。

「そうか。それは残念だったの」

家康はまた視線を十兵衛にもどすと、
「そちの志が間違うて居ると思わぬ。したが、時勢の診断は狂うて居る」

「は!？」と、十兵衛は眼をむいた。眼をむくと、いよいよ壮年の頃の信長によく似ていた。

「すると上様は、この十兵衛、時勢を知らぬと仰せられまするか」

「知らぬとはいわぬが、誤っていると申したのじゃ。そちは並の人よりずっと若い。もう二、三十年して出直すことじゃの」

「は……!？」

と、また十兵衛長安は奇妙な声をもらした。

おそらく家康の返事が意表を衝いて、突嗟に判断出来なかったのに違いない。

家康は、固くなって控えている大久保忠隣に、

「この者は、泰平日本に仕えたいと申す。わしに仕えたいのではない」

「そんな……それは、上様が泰平の御代を開くお方と……」

「忠隣! わしが求めているのは泰平の御代に仕える者ではないぞ。泰平を開こうとして、血みどろになっている、この家康に仕える人が欲しいのじゃ」

この一言で、十兵衛長安は、サッと一度に頬をこわばらせてうなだれた。

(しまった!)

ここでも口数が多すぎた……そう悟った者の狼狽があらわに見えた。

「わしがもう二、三十年待つて出直せと申したのは、その頃までに日本国も泰平の礎を据えるであろうという意味じゃ。それまでは、泰平どころか、どうして泰平を築いてゆくかで、そのための戦ばかりじゃ。十兵衛は、それを早合点して、もう泰平がやって来たかのように錯覚している。少し思案が先に走りすぎる。そうは思わぬかな忠隣は」

大久保忠隣は、ぐっと言葉に詰ってしまった。

まさに家康のいうとおり、泰平日本に仕えたいなどというのは、少しばかり思いあがった高言すぎる。

(何故、上様にこそ仕えたいのだといわなかったのか……)

「ハハ……」

と、家康は笑った。

「まあ、今日はゆるりと世間話でもしてゆくがよい。そちが自分の姓を与えたいと思うほどの者ならば、何れどこかに見どころのある男であろう」

そういつてから家康はまた十兵衛に話しかけた。

「そなたは二十数年間、何故主を持とうとはしなかったのじゃ。その間に太閤殿下にはお目どおりの機はなかったのか」

そういわれた瞬間に、十兵衛の両手はびたりと畳についていた。両手の上にボトボトと涙をおとし、肩をはげしく震わしだしている。

「わしは、そちほどの弁巧者ならば、太閤がよろこんで使った筈だと思うがどうじゃ。ご生前にお目どおりは出来なんだか」

又問いかけられて、こんどは十兵衛の咽喉の奥から奇妙な泣き声もれだした。

六

「恐れ入ってござりまする」

十兵衛は奇妙な嗚咽おえうのあとで、ゾーッとする程冷静な、水のような声でいった。

「太閤殿下にもお目にかかりましてござりまする」

「山師としてか、猿楽師としてか」

「その双方にござりまする」

家康は充分にこの男に興味を覚えている様子で、

「そうであらうな。して、何でそのおり苗字ぐらゐは頂かなかったのじゃ」

十兵衛は、性根を据えたという面持で、

「おそれながら、私の方で、い、やになったのでござりまする」

「なに、そなたの方で、太閤殿下に去り状をつけたと……」

理由は何じゃ」

「はい。かくりまする上は何をつつみましよう。私が、山師として豊家の富をふやしましても、それはいさかも日本の富を増し、泰平を築くことには相成らぬ……と、私めに訓しづえて呉れた者がござりまする」

「ほう、これは妙なことを聞くものじゃ。それはいったい何者じゃ」

「はい、日蓮大聖人にござりまする」

家康はびっくりとした。問い詰められて窮したあげく、この男、発狂したのではあるまいかと思ったのだ。

ところが相手は、いよいよ冷静に姿勢を整えて、

「と、だけ申上げましたのではご不審に思召しましょう。上様は、本阿弥光悦という刀の目ききをご存知でござりましょうか」

「おお、よく知っている。わしが駿河に人質としてあったおり、あれの父の光二が、よくわしのために玩具の太刀を作ってくれたものじゃ。その縁で今でも出入を許してあるぞ」

「日蓮大聖人は、その光悦の口を通して、私めにこの事を訓しづえて呉れました。人の心に立正りっしやうの大願なくば、人も家来も物も黄金も、必ず何時かその持主に叛逆するものじゃと」